



Chubu

ビジネスづくり編

「新しいビジネスづくり」に成功している中部の中小企業を紹介する特集。今回は、創業50年を超える(株)サンウエスパ。従来型のリサイクル事業に革新をもたらし、さらに、カンボジアで人々の生活や環境に有害な作用をもたらす害草を利用したエネルギー事業へも進出。国内外で注目を集める事業展開のストーリーを紹介する。

SUNWASPA

(株)サンウエスパ

代表取締役 原 有匡 さん(39)

不要なものに価値を見いだす 害草を原料としたベンチャー事業で奮闘

リサイクル事業にIoTと海外展開で革新をもたらす

伝統的な古紙回収業からの転換を目指し入社

50年を超える歴史を持つ企業でも業界内では若い部類に入るといえるリサイクル産業。そこで今、注目を集めているのが、岐阜県岐阜市に本社を置くサンウエスパだ。現・代表取締役の原^{ともただ}有匡さんが入社するまでは、伝統的な古紙回収事業のビジネスモデルを長らく踏襲

する企業だった。原さんはどのような狙いで、新事業への挑戦をはじめたのだろうか。

原さんがサンウエスパに入社したのは2011年。31歳の時だった。それまでは古美術品の売買をボーダレスに行い生計を

立てていたが、サンウエスパ創業者の大叔父やその妻の先代社長から、「会社を継いでほしい」と口説かれた。一旦は断ったものの、創業者が亡くなる直前に改めて「岐阜にこだわらず、好きな場所で好きなことをやればいい」と言われたこともあり、「そこまで言ってくれるなら」と入社を決意した。

IoTを取り入れた回収施設が約75店舗に

サンウエスパに入社した原さんは、古紙回収トラックのドライバーに半年間従事した後、本社で先代社長と机を並べ、経営を学んでいった。

これまでと変わらない事業を続けていては自分が来た意味がないと考え、2013年に開設したのが地域のリサイクルハウス「エコファミリー」だ。24時間365日いつでも利用可能な回収施設は、回収日時に縛られた



事業承継の話を持ち掛けられた時、「会社勤めの経験がなく自由に生きてきた自分が、岐阜に定住し組織で働くことに抵抗があった」と原さんは当時を振り返る

企 業
DATA

企業名：株式会社サンウエスパ 代表者：代表取締役 原有匡 創業：1969年 従業員数：52名(2020年3月現在)

事業内容：古紙回収事業、バイオエタノール事業、エクスポートビジネス、エコファミリー事業

所在地：岐阜市岩田西3丁目429番 TEL：058-241-8077 FAX：058-241-8071 URL：<https://sunwaspa.com/>



エコファミリーで古着の回収をはじめたことがきっかけで、古紙の回収量も大幅に増加した

くない人たちに響いた。また、趣味趣向がわかるものを廃品回収や自治体のごみ収集など他人の目に晒されるのを避けたい人たちのニーズにも合

致し急成長。今では岐阜県・愛知県を中心に約75店舗を展開する事業に発展している。

さらに、エコファミリーに来訪するとBluetooth経由で自動的にエコポイントが付与される専用アプリを開発。エコポイントで参加できるキャンペーンを企画・提供することでリピーターを獲得している。加えて、回収品の集まり具合を測るセンサーと自動的に資源回収車を手配するAIシステムを導入し、回収作業の効率化を目指した。すでに取引先企業には実験導入しているもので、定期回収に比べ回収頻度を65%に抑える成果をあげており、今後は地域団体からの古紙回収への導入も視野に入れている。効率的な稼働という意味で、ドライバー不足が叫ばれる日本の物流にとっても大きな可能性が感じられる。



エコポイントを貯めて豪華商品が当たる、業界初のリサイクルを楽しむアプリ

人口減に打ち勝つためリサイクルの出口を海外に

エコファミリーは、新たな事業の出発点にもなった。それまでは回収後に焼却処分されることも多かった古着が発展途上国では高値で売れることを知り、古着の輸出を開始。これまで価値のなかった古着に価値が生まれたことに光明を見だし、それが現在の「不要なものに価値を見いだす」という企業使命につながった。

「発展途上国で古着の需要高騰を知ることができたのは、古美術品の売買をしていた時代から海外への高い関心を持ち続けていたから」と原さんは振り返る。引き合いの話が来ても「外国だから」と及び腰になる同業社が多い中、サンウエスパは一歩踏み込むことで事業を伸張させていった。

「要らないものを要る人のもとへ届ける」というリサイクルの原則。但し、人口減少が続く日本では「要る人」が減少していくことは確実だ。そこで、国内で頭打ちとなる「要る人」を、海外に求めようというのが原さんのビジョンだ。こうした先見の明が奏功し、原さんが代表取締役就任した2015年以降、サンウエスパの売上高は毎年10%前後の伸長率で右肩上がりを続けている。



回収した古着はマレーシアの契約工場で仕分け後(上)、世界中の発展途上国に輸出される(下・フィリピンの古着屋)

日本からカンボジア、そして世界へ羽ばたく「害草ベンチャー」へ

“紙くず”をエネルギーに変えたい

原さんはある時、特殊な酵素を持つエビの存在を知った。その酵素があれば、シュレッダーダストなど紙くずに含まれる植物繊維の細胞壁(セルロース)を糖化、発酵、蒸留することでバイオエタノールが抽出できる。衝撃だった。「ゴミからエネルギーを生み出す」のは、要らないものに価値を見出すリサイクルの理想形だと感じ、2015年から研究を開始した。

しかし、そこで突き当たったのはコストの壁だった。バイオエタノールは、海外の大規模工場や日本の大手企業の工場でも、国の補助金があれば赤字なのが現実だという。燃料としての使用



本社工場に設置されている研究開発用のエタノール製造プラント

を促すなら、最低限ガソリンより安くなければマーケットの需要は獲得できない。大学などと共同で研究を続けるも、酵素の購入コストや流通経路などもネックとなり、「日本では自分たちのエタノールに付加価値をつけることは難しい」と断念するに至った。

カンボジア政府も注目した害草の有効利用

「日本がダメなら海外で」。原さんは、カンボジアにある東南アジア最大の湖・トンレサップ湖に繁殖する、世界三大害草の一つホテイアオイに着目した。トンレサップ湖は、雨季には琵琶湖の20倍以上の面積となり、水上生活者は100万人を超える。水面に浮かんで育つホテイアオイは、10日で2倍、7カ月で200万倍にも増えるという驚異的な繁殖力を持ち、成長がはじまるとすぐ湖面を覆ってしまう。水上交通や漁業の妨げとなり、水生植物では5つしかない世界の侵略的外来種ワースト100に指定される害草となっている。



水上生活者の村落を覆いつくすホテイアオイ。日本ではメダカの飼育によく使われている水草

しかし、原さんはその繁殖力に目をつけた。ホテイアオイからバイオエタノールを精製し、現地の水上生活者

が使うボートの燃料にする「小規模分散型リサイクル」の実現を目指した。害草の回収を仕事として提供することで水上生活者の暮らしも改善したいという強い思いもあった。

害草を使ったバイオエタノール製造プロジェクトは、JICAの中小企業事業イノベーション枠にも採択され、案件化の調査を1年間実施。調査期間中にはカンボジア・コンポンチュナン州の副知事がサンウエスパ本社へ視察に訪れるなど、カンボジア政府も注目するプロジェクトとなった。

コストの壁が新たな展開につながった

順調に進むかにみえたプロジェクトだったが、ここでもコストがネックとなる。そこで、原さんは「より付加価値を高くすればいい」と発想を転換。ホテイアオイを原料とするバイオエタノールを用いたクラフトジンの製造に目を向けた。飲料用アルコールにすれば売価が跳ね上がることに着目したのだ。

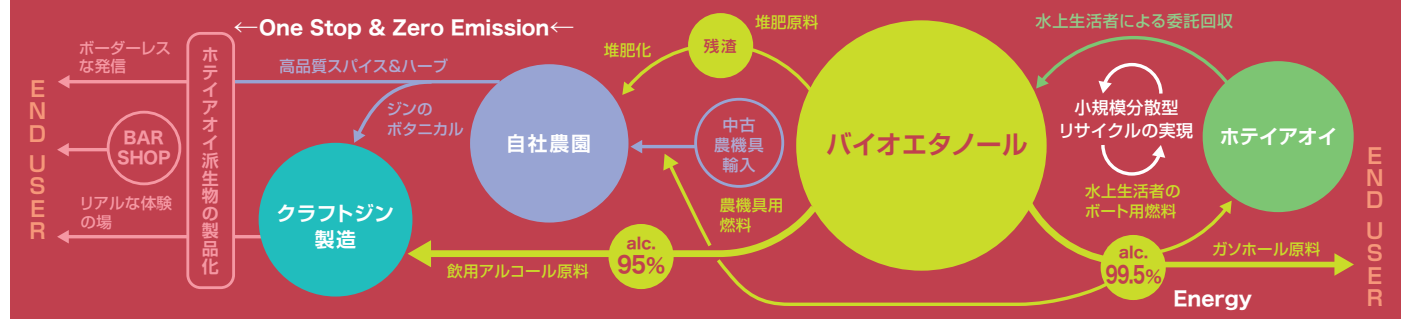
カンボジア特産のスパイスとハーブを使ったカンボジア産ジン、そして、カンボジアの課題解決に貢献する



ジンの試作品(左)と使用したスパイスとハーブ(右)。蒸留所を営む知人からアドバイスを受け、原さん自らがブレンドを調合

ホテイアオイを核としたエネルギー事業

ホテイアオイからバイオエタノールを製造するエネルギー生産を中心に、生産工程で排出される残渣を活用してスパイスとハーブを育成する自社農園の運営やクラフトジンの製造を行っている



ジンとしてブランディングを行い、旅行者や感度の高い外国人をターゲットとした製品づくりや、コンセプトバーをプノンペンに開業することを計画。今年4月に現地で子会社を登記し、事業を開始した。

原さんは、さらなる広がりを見据えている。熱帯・亜熱帯に多く見られるホテアオイの分布は、ミャンマーやバングラデシュなど急速な経済成長を遂げている国のそれと一致する。ホテアオイを起点に多くの国で事業展開していくことで、大きな収益が可能となる。そのような将来像を語る原さんは、冗談混じりで『『害草ベンチャー』という唯一無二の称号を得られるかもしれない』と笑った。

「変化こそ不変の本質」をテーマに走り続ける

原さんが新規事業を生み続けるのは、「新しいことに挑戦し続けたい」という思いからだ。新たな分野に挑むことで好奇心を維持し、その好奇心を原動力として自身も会社も次のステージに進むことができる。「変化こそ不変の本質」というサンウエスパの掲げるテーマも、社会自体が急激に変化している現代には不可欠な



デスクチェアはなんとバランスボール。働きながら体幹も鍛えられる健康的なオフィス

もの。常々社員にも「変化を恐れるな」と伝え、自分自身も「こだわりを捨てる」ように意識して取り組んでいる。

また、新入社員が成長するためには「自分で仕事をつくっていくこと」が大切とも考えており、新たな事業は新入社員が担当し、自ら主導して物事を進めるポジションを与えている。新入社員を会社の歯車にはしない会社にするべく、原さんは今日も次なる挑戦の場を探し続けていく。

文：(株)広瀬企画 広瀬 達也

写真：無印/西澤 智子 撮影

☆印/サンウエスパ 提供



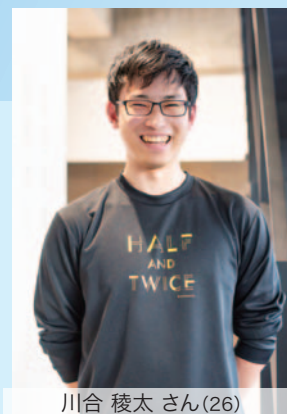
Chubu
ビジネスづくり編

バイオエタノール製造担当者にインタビュー

世界の人を笑顔にできる可能性を秘めた研究

岐阜県の大学卒業後サンウエスパに入社して5年目です。就職活動で多くの企業が業務の説明ばかりする中、サンウエスパは社長が将来の展望を語ってくれたことが印象的で夢があると感じ、入社を決めました。

今取り組んでいるのは、バイオエタノール製造の事業化に向けたコストダウンです。ほかに、技術面のほとんどを任されているため、大きなやりがいを感じています。この研究は「世界の人を笑顔にできる」可能性を秘めています。カンボジアを訪問した際に会った、ホテアオイに悩まされている水上生活者たちが笑顔になる未来を想像しながら、これからも研究に励んでいきます。



川合 稜太 さん(26)



トンレサップ湖で暮らす漁師一家。
ホテアオイが邪魔で漁に出られない日もある



世界の人を笑顔にするため日々研究に勤しむ川合さん